

第4回研究全体会提案資料 2学期からの研究について

研究企画委員会提案用

1 研究主題の根拠

(1) これまでの研究における生徒の姿から見えてきた成果

- ① 教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて追究することのできる適切な学習課題を設定し、教師が効果的な声かけをすれば生徒は教科の本質に迫ることができることがわかった。
- ② 生徒の実態に応じて意図的にチームを組み、チームや個の学びに対する適切なファシリテートをすれば、生徒は豊富な活動量のもとで意欲的に深く学ぶことができるとわかった。
- ③ チームとチームをつなぐことで、生徒の学びがチーム内で終始することなく、より多面的・多角的に考えられることがわかった。
- ④ スクールタクト等により生徒の学習過程を教師が把握し、それに即した資料提示や声かけをすることで、生徒の学習意欲が高まったり、追究が深まったりすることがわかった。
- ⑤ 黒板やチームでの成果物など、これまでの授業では保存できなかったものもICTを活用することで学習履歴として保存できることがわかった。また、それを生徒が活用することは、生徒の活動力を確保したり、個別の追究に活かしたりすることにつながることをわかった。
- ⑥ 目指す生徒像を共通認識したことにより、教師の指導がしやすくなった。また、生徒も目指す姿が明確になったことで、粘り強く学習したり、チームメイトを尊重したりできるようになってきた。
- ⑦ 生徒が学習手段を選択できる環境を作ることにより、生徒に自分に必要な学び方を考え選択する力がついてきた。

(2) これまでの研究から見えてきた課題

- ① チーム編成の仕方について、WEBQUテストの結果や日々の細やかな見取りに基づいた編成をどの教科でも行う必要がある。
- ② 学習課題とその授業のゴールを各教科の本質に迫れるようにより練る必要がある。また、授業のはじめに学習課題とゴールを示すことで、生徒の追究活動の時間を保障する必要がある。
- ③ チームとチームを上手くつなげられないことで、チームの学びに広がりや深まりを生めないことがある。
- ④ チーム学習を基本とした授業の中で、いかに個別最適化教育を実現していくかが明らかになっていない。
- ⑤ 学習の成果と学び方の両方を毎時間振り返ることは、時間の面からと記述内容の充実の面から考えて難しい。
- ⑥ 生徒を客観的に見取る指標が明らかになっていない。

2 研究主題

次のように研究主題を設定する。

自ら未来を切り拓く生徒の育成 ～ ファシリテーションを核としたチーム学習を通して ～

3 目指す生徒像

2の研究主題を通して、目指す生徒像を次のように考えた。

「自立し、共生社会の担い手となる生徒」

- ・自分の課題や変容を自覚し、価値判断や意思決定ができる生徒。（＝自立した生徒）
- ・互いの存在や価値観を認め合い、誰一人取り残さないようにするために、集団における自分の役割を果たす生徒。（＝共生社会の担い手となる生徒）

4 研究の仮説

目指す生徒像を実証するため、研究の仮説を次のように設定する。

チームを編成し、生徒同士が学び方を調整し合いながら学習を進め、教師が生徒の学びの促進役に徹する授業を積み重ねれば、未来を切り拓く生徒を育成することができるであろう。

本校が考える「ファシリテーションを核としたチーム学習」とは

これまでの教師主導型の一斉授業から授業観を転換する。チームメイトとのかかわり合いを通して生徒が学び方を調整、支援し合う「生徒によるファシリテーション」と、生徒の学びや生徒同士のかかわりを教師が促進する「教師によるファシリテーション」、この二つのファシリテーションによって支えられるチーム学習を表している。

生徒によるファシリテーションのためには、生徒の相互理解と対話、そして自己分析が必要である。そのため、4人程度のチームを編成し、一定期間はそのチームを基本としてすべての教科・領域の授業に臨む。そうすることで、必然的に生徒はかかわり合い、互いの個性や得手不得手などを理解し合うだろう。その上でチームの「誰一人取り残さない」ことを目指して生徒同士が互いの学習手段や進度などの学び方を調整し合う。また、生徒がチーム学習における自分の姿を振り返る場を設定する。生徒は自分の姿を自己評価し、よりよい姿を目指す。

教師は生徒の状況の把握に努め、チームや個人の学びの促進役に徹する。安易に教え込むことはしない。促進役に徹するためにICT機器等を活用して生徒の各種履歴を確認し、効果的な助言や問い返しを行ったり、生徒と生徒、またはチームとチームをつなげたりする。このような授業では、生徒は常に自ら考え判断して学習する。学習の過程では、チームメイトを中心とする仲間と支え合い、互いを尊重し合いながら学ぶことの大切さに気付く、そしてそれを可能とするコミュニケーションスキルを身につけるだろう。このような授業を日々積み重ねることにより、生徒は自立し、共生社会の担い手となることができる「自ら未来を切り開く生徒」に育っていく。

5 研究の手だて

手だて1 授業までの手だて

手だて1-A

生徒の特性に応じた4人程度のチームを編成する。

日頃の様子や人間関係、WEBQUテストの結果などを参考に、学級担任が4人程度のチームを編成する。すべての教科・領域の授業において、そのチームを基本としてチーム学習を行う。一定期間は同チームで学習を進める。

手だて1-B

チーム学習の中で生徒に期待する姿や生徒の特性を記録・更新し、授業者で共有する。

手だて1-Aで学級担任が編成したチームの意図と、それぞれの生徒に期待する姿を一枚のシート（仮称：チーム編成表）に記録する。チーム編成表は授業者で共有し、各教科領域での教師支援に活かす。チーム編成表は生徒の様子や教師の願いを共有するためのものである。そのため、適宜更新できるようにし、生徒への教師によるファシリテーションに活かす。

手だて1-C

目指す生徒像と学び方のルールを生徒に示す。

目指す生徒像と学び方のルールを全校生徒と共有する。また、目指す生徒像と学び方のルールを教室に掲示し、生徒がいつでも確認できるようにする。この掲示は教師によるファシリテーションにも活かすことができる。授業の中の必要な場面で生徒と一緒に目指す生徒像や学び方のルールを確認し、生徒のよりよい学びにつなげることも教師によるファシリテーションの一つといえる。

手だて1-D

自分の学び方を振り返る場を設ける。

目指す生徒像である「自立した生徒」「共生社会の担い手となる生徒」に向かう学び方ができているかどうかを振り返り自己評価する場を設ける。生徒にとってこの振り返りは、自己を客観的に見つめなおす機会とし、さらなる学び方の改善につなげることができる。教師にとっては、生徒の自己評価を把握し、授業内での励ましや称賛等のファシリテーションに活かすことができる。

手だて2 授業における手だて

手だて2-A

教科の「見方・考え方」を働かせることのできる課題解決型の学びを構成する。

教科の本質をとらえた成長を生徒が実感できる授業づくりを目指すことは、教師としてゆずれないところである。そのため、授業を通して「生徒は何ができるようになればよいのか」「生徒にどんな力がつけばよいのか」について教師が見通しをもつことが重要である。そこで、各教科部会で教材研究をし、教科の「見方・考え方」を働かせる課題解決型の単元や授業を構成することとする。そして、授業において働かせたい「見方・考え方」を指導案に明記する。この手だて2-Aにより、生徒が自分で価値判断をする必要性を感じたり、チームメイトとかかわり合う必然性が生まれやすくなると考えている。

手だて2-B

生徒同士の学び合いによって課題解決を図れるように生徒に学習をゆだねる。

生徒が自ら考え、チームでの学び合いによって学習を進めるためには、十分な時間を確保したうえで生徒に学習をゆだねることが必要である。教師は細かい指示はしない。これも教師によるファシリテーションの一つであり、この手だてによって、チームメイトと試行錯誤ししながら課題解決を目指すことが可能となると考えている。

手だて2-C

生徒が学習を個別に最適化できる手段を用意する。

生徒一人一人にとって、最適な学習手段は異なるだろう。例えば、一人で考えた後にチームメイトに意見交換をする、教科書を参考にする、既習の内容を振り返る、など、複数の学習手段の中から生徒が個別に最適化できるようにする。これも教師によるファシリテーションの一つである。この手だてによって、生徒は自分で価値判断や意思決定をすることが可能になる。また、その過程では生徒によるファシリテーションによって、より最適な手段を模索し合うと考えられる。

手だて2-D

生徒の学習状況や各種履歴をもとに価値づける。共感する。問い返す。励ます。

教師はまず、生徒の把握に努める。各チームの学習の進捗状況や、前時までの個人の追究の過程や思考などを把握する。あわせて、手だて1-Bのチーム編成表から、生徒一人一人の特性を把握する。把握した生徒の様子をもとに、チームや個人を支援する。例えば、個別に励ましの声をかけたり、チームでのかかわり合いを促したりする。また、生徒と生徒、チームとチームをつなげることで、生徒の考えに広がりや深まりが生まれるようにしたりする。時には生徒の思考をゆさぶる問い返しを行ったり、新たな資料提示を行ったりする。教師は決して生徒の学習過程や成果を否定しない。この手だてによって、生徒の追究意欲が高まったり、チーム学習が活性化したりすると考えられる。

6 授業展開の例

8月6日現職研修会の鈴木正則教授の資料の場合

プロセス	分	生徒の活動	教師の活動など
1	10	<p>① 学びのロードマップにより、単元の中の本時の位置づけを知り、本時の学習内容を知る（知った上で授業が始まるとよい）。</p> <p>② 本時の問題、資料などを知る。</p> <p>③ 本時の課題をとらえる。</p> <p><教師> (問題や資料を提示して) 「気づいたことに何がありますか」 「前時までと何が変わっているでしょうか」(共通点や相違点を問う) 「本時は何を追求したらよいでしょう(課題にしたらいいでしょう)」</p>	<p>(学びのロードマップ(単元計画)を与えている場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題や資料の提示の工夫をし、発問し、問いや見通しをもたせる。 (必要に応じて) チーム確認・相談を行うようにする。
		<p>見通しをもつ</p> <p>○見通しとして、目の付け所やポイントとなる点を話し合う。</p> <p><教師> 「どんなところに目を付けたらよいでしょうか」 「解決のポイント(ヒント)となることをみんなに伝えてください」</p>	<p>*課題の理解と見通しをもたせることは一連の活動として行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> (必要に応じて) チーム確認・相談を行うようにする。B (必要に応じて) 全体で見通しについて話し合う。
2	3 ～ 5 B	<p>○考えをノートなどにかく。 (どのように考えたのか、目の付け所やポイントなども書かせる)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 何に取り組むのかを指示する。 誤答やつまずき、わからない、途中までの場合も認める。
3	10 ～ 15 B	<p>○チームで活動する(話し合い等)。</p> <ul style="list-style-type: none"> チーム学習のルール、チーム学習の進め方(手順)に基づき、対話のスキルを発揮しながら話し合う。C 個人の取組の際に、わからない、つまずいた生徒はメンバーに説明を求め、理解できたら自分の言葉で説明をし、取り組み直し(解き直し)をする。C 	<ul style="list-style-type: none"> 活動時間を告げ、時間内に取り組ませる。 チームで取り組むこと(話し合うこと)は何か、チームとして考えをまとめるのかを明示(指示)する。 巡視して、話し合いの内容を把握するとともに、チーム学習のルール、進め方、スキルが発揮されている、協同的な態度で活動が進んでいるか点検し、状況に応じて指導する。D チームとして考えがまとまらない、

				<p>解決できない場合も認め、つまずいているチームには話し合いの進め方を助言したり、他チームから支援を受けることを助言したり、チーム間交流で他チームから説明を受けるよう助言したりする。D</p>
4	チーム間交流 全体交流	15 ～ 20 B	<p>○チーム間交流，全体交流で学び合う。</p> <p><A：一斉提示法> ①提示・分類整理 3分程度 ②比較検討・まとめ 15分程度 <B：お出かけバス，C：スクランブル法> ①他チームの学習成果を知る。 3分程度 ②チームに持ちかえりチームの考えを深める。 7分程度 ③全体交流（共有） 5～10分程度 チームに発表させ，全体で共有する（まとめる）。</p> <p><D：ジグソー法> ①エキスパートグループ 10分程度 ②元チームで話し合い 10分程度 ③全体交流（共有） 5～10分程度 *ジグソー法は時間的配慮が必要である。</p>	<p>・活動時間を告げ取り組ませる。C ・教師は話し合いのファシリテーターとなる。D</p> <p><ファシリテーターとして></p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの進め方を助言する。 ・課題に照らして，話し合いを焦点化する。 ・課題に照らして話し合いの方向を示唆したり修正したりする。 ・チームを関わらせる。 ・話し合いの内容を他生徒や他チームへ広げる。 ・意図的指名（チーム，生徒）をして意見を引き出す。 ・特殊な考えがあれば，それを紹介する。 <p>・話し合いの状況をみながら，チームで確認・相談を行うようにする。</p> <p>・全体交流で，話し合いがまとまらなかったり，よりよい考えを導くことができなかった場合は，教師が説明したり，まとめる場合もある。</p>
5	まとめ 振り返り	7 ～ 10	<p>○本時の課題に照らして，本時の学習をまとめる。</p> <p>○本時の学びを振り返る。 (学びのロードマップに振り返り欄を設けた場合) 学びのロードマップに振り返りを書き，自分の学びの状況を捉えるとともに，次時にどのような学習をするのか，本時の学習とどう繋がっていくのかとらえる。</p>	<p>・まとめは全体交流で行えるとよい。</p> <p>・まとめと振り返りのどちらを先にするかは学習内容や振り返りの内容に応じる。</p> <p>・(必要に応じて) チーム確認・相談を行うようにする。</p> <p>・振り返りは個人とともに，チームとしての振り返りを書く場合もある。</p>

6月9日 第1回校内授業研 太田の授業の場合

段階	生徒の活動	教師の活動
見直し (5)	○ 本時の学習課題を把握する。	・資料1, 2, 3を提示し, 世界のどの地域の生活の特色を表した資料かを問う。
追究 (40) B	○ 資料が世界のどこのくらしを表したものと, その根拠を考える。 ◎ 資料が世界のどこの地域の生活を表したものとその根拠を話し合う。 根拠となる資料は, 過去のノートや, 教科書, 資料集や教師提示資料などから生徒が選ぶ。C 資料1 (ヤクーツクの住居) ・永久凍土を溶かさないように高床になっている。 ・窓が多いのは, 夏に外気を取り入れたり, 二重窓によって, 気密性の高い熱を逃がさないようにしたりするためだ。 ・(寒い地域なのに) 屋根が平らなのは, この地域は雪があまり降らないからだ 資料2 (サウジアラビアの衣服) ・暑くても長袖なのは強い日差しや砂埃から肌を守るためだ。 ・(熱を吸収するのに) 女性が黒い服を着ているのは, イスラム教の考え方による。 ・女性が頭まで布で覆っているのは, 水が貴重なため髪が汚れるのを防ぐ狙いもある。 資料3 (イタリアの食事) ・乾燥に強い小麦を主食としている。 ・少ない降水量でも育つトマトと合うから, ピザやパスタが好まれる。 ・(うどんではなく) パスタにするのは, 降水量の少なさが要因だろう。 ○ 他のチームの考えを聞く。C ◎ 自分のチームメンバーと情報を共有する。C ○ 他のチームの級友に本時の学習課題に対する自分の考えを説明する。	・三つの資料の中から一つを選んでも三つ全てについて説明しても良いことを伝える。C ・スクールタクトや机間指導で生徒の考えを把握し, 問い返しを行う。D 例 資料1 ・(暑い地域は風通しを良くするために窓が多かったが) どうしてこの地域の住居には窓が多いの? 資料2 ・(暑い地域なのに) どうして女性は黒い服を着ているの? 資料3 ・(日本は小麦をうどんにするのに) どうしてこの地域はパスタにするの? ・全体に関わる問い返しや称讃はスクールタクトの授業チャット機能を使うことで全体に示す。D ・チームの全員が学習課題を達成することを目指せるように励ます。D ・より多面的な考え方に触れるように, 他のチームと交流する時間(アップグレードタイム)を設ける。D ・スクールタクトを協働閲覧モードに切り替え, 級友の考えを見られるようにする。D ・困っている生徒を他の生徒とつなげる。D
振り返り (5)	○ 学習の成果と学び方を振り返る。 ・単元を貫く学習課題に対する自分の考えをまとめる。	・世界各地の伝統的な生活様式が変化してきていることを共通認識し, 次時の学習につなげる。